

長崎と佐世保の文化運動への 一観点

坂口 博

楠田さんの報告へのコメントの前に、私自身の山田かんへの関わりについて、「懺悔」めいた話から始めたい。

一度だけ山田かんと会つたことがある。もつとも、相対しての一対一の面談ではなく、正確にいえば「見た」ことがある。それは一九七六年一〇月三一日（日曜）に、福岡市内のホテルで開かれた、「詩の教室」であった。詩誌「筑紫野」を出していた福岡詩人会議主催で、山田かん詩集『アスファルトに仔猫の耳』（砲岷社、75・1）を題材としたものだった。この会合を如何にして知り、参加する気になつたのかは、よく覚えていない。当時付き合つていた詩人の友達に誘われたのかも知れない。

この時、作者本人も参加され、講演の話を聞く機会があつた。さして人数は多くなかった。当時、一九七〇年代は、こうした文學者をじつさいに見、話を聞くことができる福岡・北九州での講演会や会合には、積極的に参加していた。小田実・五木寛之・井上光晴・谷川雁は、そのようにして、一度だけ見たことがある。著作を読んでいただけに、それぞれの印象は深いものがある。

しかしながら、山田かんに関しての印象は薄い。何かボソボソと話す詩人というだけで、その具体的な内容も記憶になく、また当日に初めて知つた詩数篇についても、私の好むところではなかつた。また、主催が日本共産党系の詩人会議であつたことも印象を悪くしたのかも知れない。この頃、好んだ詩人の谷川雁・森崎和江にしろ、井上光晴・黒田喜夫にしろ、共産党とは反する立場に居たからだ。ただ、生来の保存癖は、当時の資料を棄てずにはいたのだった。

おそらく、山田かんが「サーケル村」に参加していたのを知つたのは、その直後あたりに違いない。時折、長崎の詩人として、彼の名前は随所で見るものの、それ以上の関心を示すことなく、過ぎてしまつた。花田俊典から「絞説」特集で山田かんへのイントヴューをする話を、事前に聞いたときも、諫早まで出かける意欲が湧かなかつたのが事実である。第一詩集『いのちの火』の全コピーも、その折に貰つていた。

今回、コメントのために『記憶の固執』（長崎文献社、69・8）『長崎・詩と詩人たち』（汐文社、84・11）『長崎原爆・論集』（本多企画、01・3）『長崎県の現代詩史』（長崎新聞社、07・8）『古川賢一郎 濑江周堂と戦争』（長崎新聞社、08・12）といった評論集を読み進め、また長崎における戦後文化運動のなかで、彼の果たした役割を再検討していくうちに、直観的に抱いていた山田かんへの「評価」を、大きく訂正する必要を迫られている。はつきり言つて詩 자체は難解というより「下手」である。何回読んでも、よくわからぬ詩が多いし、イメージもつかみにくい。饒舌より

しようがない。ただ、「下手くそ万歳」といった視点ではなく、その持続にこめられた切実さ、真摯さの背景にあるものを考えたとき、新たな問題が見えてくるようを感じる。

さて、楠田報告資料と一部重複するが、あらためて山田かん年譜を一九五九年まで辿つてみたい。入党してすぐに「脱党」したとされる共産党体験を、具体的に検証するために関連事項を補つ。また、参考までに詩誌「列島」への投稿作品評も付加した。

一九三〇（昭5）

10月27日生まれ。姉・瑛子（えいこ）、妹・琇子（ゆうこ）。

「次の母」（36年8月実母・道32歳で死去。父の後妻・政子）の産んだ、弟以下五人、計八人兄弟の長男。

一九四八（昭23）（18歳） 7月15日、父好雄47歳にて事故死。直ちに新制長崎高等学校を三年で中退する。恩師の紹介により長崎県立図書館に勤務する。月給千五百円。この頃から詩作を試みる。

9月から定期制（夜間）高校四年へ編入、翌年春に卒業する。

一九四九（昭24）（19歳） この年、日本共産入党。結核を患うも、勤務しながら、一週間に一度の気胸療法を三年位続ける。「1月、衆議院総選挙で共産党35議席獲得。6月、九月革命説が流布する」

一九五〇（昭25）（20歳） 「1月、コミニンフォルム批判。主流派（所感派）と国際派に大きく分裂する。6月、共産党中央委員追放。朝鮮戦争開戦」

一九五一（昭26）（21歳） 「2月、四全協、軍事方針決定。9月、サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約調印。10月、五金

協）

一九五二（昭27）（22歳）

（4月、講和条約発効。5月、東京・

メーデー事件。武装闘争（火炎ビン闘争）開始。）6月、サークル

誌「芽だち」創刊に参加する（筆名・池井朔）。〔10月、衆議院総選挙で共産党0議席〕

一九五三（昭28）（23歳）

4月、サークル誌「なかま」創刊に参

加。（4月、衆議院総選挙で共産党1議席）夏、福岡市箱崎町の小さな書店で「列島」第5号（8月号）を見つけ、会員となる。

一九五四（昭29）（24歳） 1月8日、妹・琇子21歳にて佐世保市郊外・日野峠で自死。3月、詩集『いのちの火』（私家版）刊行。

「追悼詩集として、妹の香典返しとして配布した」。詩誌「列島」に投稿を始める（のちには、7月創刊の「現代詩」にも）。7月号、瀬木慎一「最近の詩集から」（いのちの火）短評。9月号評「○屋上庭園 山田かん／関根（弘） なんというのか、これは。文明嫌悪のペシミズム……瀬木 屋上から世相をみおろす、とい

う狙い、大正時代を感じさせる。」11月号評「○工場聯想 山田かん／御庄（博実） 言葉に無駄がありはしないか。短縮することは詩の一つの生命である。／関根 そう思います。観念の連鎖と物語性がマツチしていない。短かくてピンとくるものがほしい。／菅原（克己） あんまり正直に順序を追つて書くので感動

がうすぐなる。強いて切り込みが必要と思う。」8月、「芽だち」第21号「原爆記念平和特集」。

一九五五（昭30）（25歳）

（2月、衆議院総選挙で共産党2議席）

3月、文芸誌「地人」創刊に参加する。「列島」4月号（第12号終刊）評「○砲弾のある庭の子供 山田かん／菅原 悲しみがも

つと漲るといふ。云いたいことをもつと強く出すか、或いは、反対に主觀をもつと引っこめて冷たく描くか。／真木 詩のことばに凝縮しようとして、ことばを押さえようと努めているために何となくきゆうくつな感じがある。もつとイメージを自由にひろげてみたら。／木島（始） この作品にはほとんど発見がない。解説に終始せず追及をすべきだ。』

「7月、六全協」この頃、共産党から離党。8月、「芽だち」第26号「原水爆反対特集」。「地人」第4号「原爆特集」。「現代詩」特集「原水爆と詩」に「地點通過」掲載。

一九五六（昭31）（26歳） 「2月、スターリン批判」8月、「芽だち」第31号「原水爆禁止特集号」。

一九五七（昭32）（27歳） 「8月、東海村の日本原子力研究所の原子炉臨界。いわゆる「原子力時代」、「平和」利用の開始」

一九五八（昭33）（28歳） 2月、「鯨と馬」で第1回「現代詩」新人賞に入選。「地人」第14号で終刊。「5月、衆議院総選挙で共産党1議席。7月、第7回党大会」9月、「サークル村」創刊に参加する。

一九五九（昭34）（29歳） 8月9日、「芽だち」第38号で終刊。

以上は、「敍説」19号（99・8）所収の横手一彦編「山田かん年譜」を主に参考していった。同誌掲載のインタヴュー「記憶の固執——山田かん氏に聞く——」のなかでは、共産党体験を「そんなに長くなかったですね。昭和二十四年に入つて、二十五年か二十六年には（離れた）と語つてゐるが、これは本人の記憶違いか、聞き間違いであろう。二十五、六歳頃を錯覚したものと推

測する。同時に「六全協が終わつてから（離れた）」と語つてゐるのだから、一九四九年から五五年の六全協まで、主流派としての党籍はあつたに違いない。この期間の長短の判断は、難しいところであろう。数十年の党歴からすれば、確かに短いものに違ないが、この時期の内外の情勢と本人の年齢を考慮するならば、決して短いとはいえない。

本人も次のように証言する。

「芽だち」の仲間に入つたのは、十七で高校を中退して、十八で共産党に参加し活動を始めたのと同じ頃ですね。まず、党活動の方は當時非合法でしたから、かなり危険でした。党の方も主流派と国際派に分裂して武装共産党といふ感じになつて、手榴弾、まあ火炎瓶ですね、そういうのが作られた時代です。私のような下つ端にも公安が張り付いてマークされていました。……私たちは居住細胞、いわゆる地域の細胞でした。それと大学細胞というのがあつて、これは宮本顯治の流れで、私たちは生活派ですから「徳田球一」の流れになります。大学に入った同窓は、当然大学細胞ということになるわけです。……党内抗争が激しくなると、居住細胞と大学細胞の間でも、同志として一緒に活動してきながら翌日は向こうにスパイに入れといふような始末で。そういう状況を見せつけられ、そこから次第に脱党という思いにつながつていったと思ひます。」（敍説 19号）

また「ドルも原子爆弾も／人民をおしえず／われら愛國者祖国の／自由のため闘わん／平和のため立て人々／戦列かためよ呼びかけをひびかせよ／戦争を許すな」という労働歌（革命歌）

を、「十数年前よくうたつた歌であり、そのご絶えて久しくうたうこともなかつたが、最近、子を抱いて眠りに誘うとき不意に口をついて出てくるぼくの青春の歌でもある」（「歌の時代」）〔長崎時事新聞〕^{65・6}〔記憶の固執〕所収」と語るもの、間接的ながら青春時代の革命運動への深い関わりを裏付けている。

もちろん、山田かんの場合、公務員としての仕事を持ち、居住細胞に属し、また病弱だったので、同世代の学生たちや組織された工場労働者のように、山村工作隊や火焰瓶闘争へ狩り出されることはなかつた。それにしても、党内闘争の影響はかなり受けたようだ。佐世保での妹の自死にも、そうした事情が絡んでいると思える節もある。しかし、当事者たちが語らなかつた以上、真相はわからない。

次に、長崎と佐世保の「戦後」文化運動について簡単に触れて、今後の課題としたい。

今回はその素材として、プランゲ文庫の新聞リストから「文化新聞」関係を抜き出してみた。北部九州まで範囲を拡げたときに、創刊順に以下のようなものが挙がつてくる。現在のところ、現物確認を一部（まさに一部！）だけでも出来たのは、「九州文化新聞」「文化ワイクリー」「暦」だけである。丸括弧内には、関係した人物等を注記した。

久留米・九州文化新聞社（金文堂出版部／川崎甲平・室園草生）

〔九州文化新聞〕^{46・3～47・8}（22号まで）
佐世保・新興芸術社（松田武・矢動丸広）

「文化ワイクリー」^{46・6～47・8}（47号まで）

「読物特集」^{47・12～48・3}（2号まで）
「暦」^{49・2}（1号のみ＝雑誌）

佐賀・共栄社

「ニユーウィークリー」^{46・7～47・1}（22号まで）

直方・筑豊タイムス社／飯塚・筑豊文化新聞社

「筑豊文化新聞」^{46・11～46・12}（3号まで）
「筑豊文化新聞」^{47・1～47・6}（14号まで）

長崎・長崎文化新聞社

「長崎文化新聞」^{47・7～49・10}（29号まで）
唐津・松浦文化連盟（笛本寅・松浦沢治）

「松浦文化新聞」^{48・4～49・9}（7号まで）
崎戸・崎戸文化連盟

「崎戸文化」^{49・2～49・9}（7号まで）

これらも決して一様ではなく、商業紙の「九州文化新聞」「文化ワイクリー」と機関紙「松浦文化新聞」「崎戸文化」を同じに論することは出来ないかも知れない。文学に主軸をおいたものと、文化一般に拡げたものも同じだ（佐賀の「ニユーウィークリー」は一般的な週刊新聞か）。いずれにせよ、個々の紙面調査から、当時の各地の文化状況がいくらかは見えてくるに違いない。長崎の「芽だち」「なかま」以外の、忘れられたサークル誌についても知りたい。

なお、佐世保の新興芸術社は、当初から新日本文学学会と強いつながらを持つ出版活動を開拓しているが、その由縁は不明であ

る。佐世保では、一九四一年三月に設立された佐世保文化連盟・佐世保文学者会の存在に注目したい。戦時下の文化翼賛運動の一環ではあったが、ここには渋江周堂・竹森久次などが関わっていた。詩人の渋江の生涯については、山田かんが『古川賢一郎 澄江周堂と戦争』のなかで詳しく追及している。竹森は敗戦直後に共産党系の出版社・九州評論社を佐世保市で設立し、ここには井上光晴が加わる。その後、九州評論社は福岡市へ事務所を移転した。さらに、竹森は東京へ出て、五月書房を興していく。

また、山田かんは佐世保について、次のように触れていた。長崎と佐世保の対比のなかで、原爆も文化運動も考えていく必要は、

今後もあるだろう。

「長崎の被爆の問題を考えるとき、常に二重映しになつて浮かびあがつてくるのは基地としての佐世保である。……このように只兄弟都市として気にかかるというよりも、ぼくは心情的意味においてそれが特にあるといえる。というのは亡父が佐世保に育ち、その地の中学校を出ていたからでもあるが、又亡妹が佐世保で命を断つたことにより、佐世保とのかかわりが特にぼくの内部に影を落としつづけてきたからである。」
（「戦争・ナガサキ・サセボ」＝「虹」73・8＝『長崎原爆・論集』所収）